蹴　　球

創刊號

長瀨兄送別を記念して

August——1934

東京商科大學蹴球部誌

△ △ △

涙の地石神井去りて國立へ

緑の風のそよぐ頃

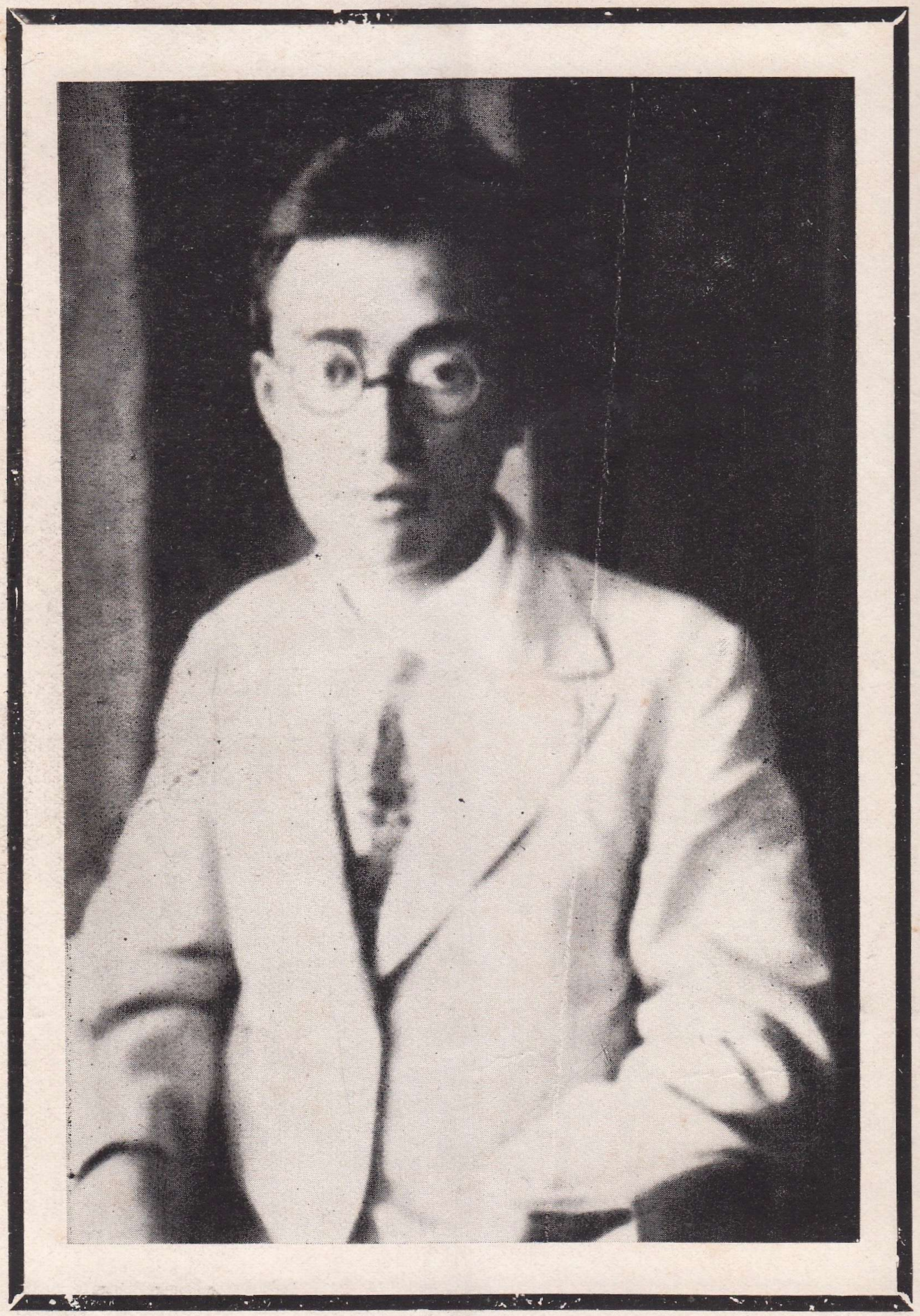
玉汗光ありて明日を待つ

健兒微笑む所—蹴球部あり

一二五九四・七・一〇

T・T生

△ △ △



今は逝きし蹴球團創設の恩人

〔本文蹴球團時代參照〕

〔故 兵藤世平治氏〕

男人六設創部球蹴

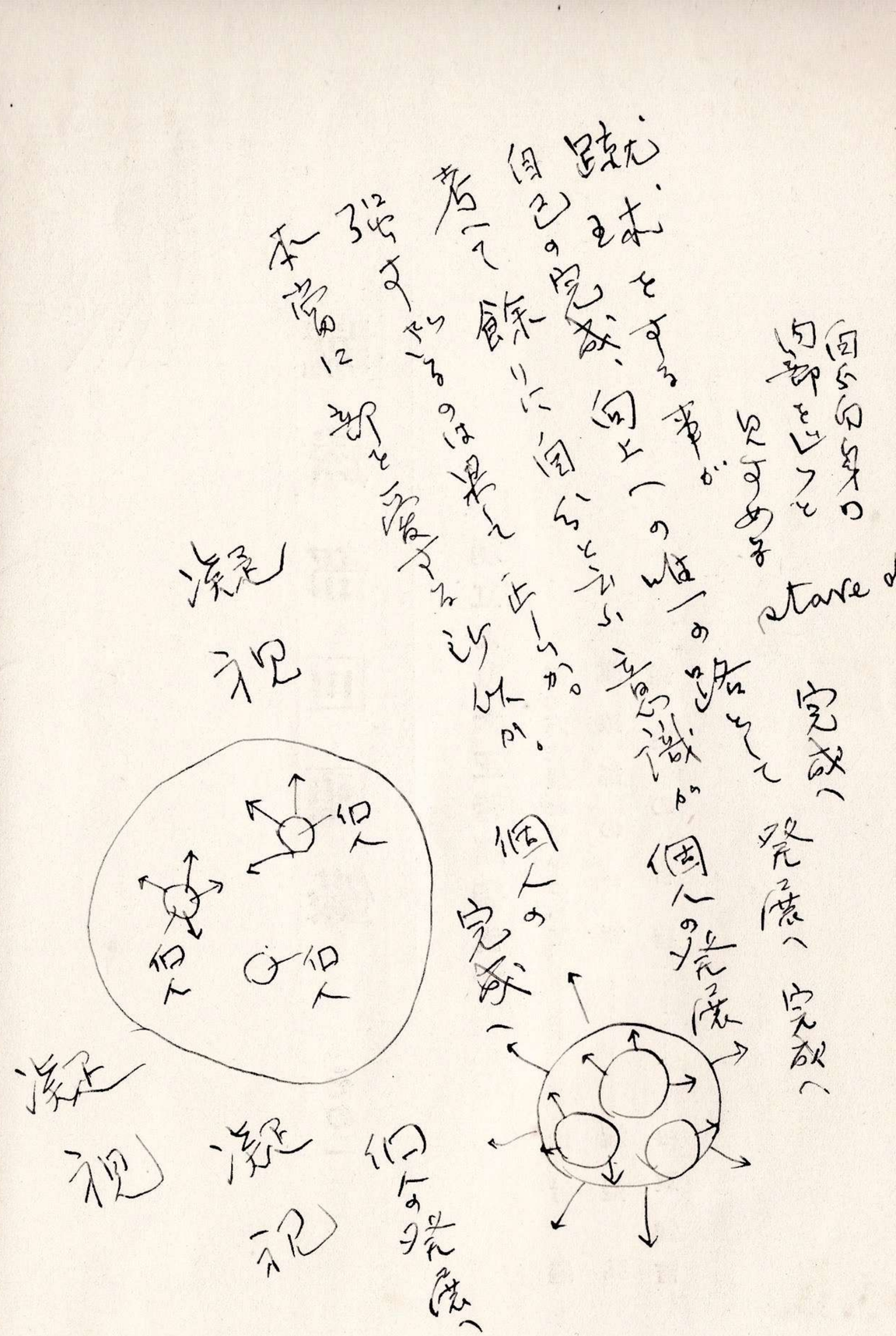
右ヨリ 川村通 松本正雄 兵藤世平治 明石毅 進藤静太郎の諸氏

内圓 高橋朝次郎氏

蹴球團第一回の對外試合を終へて　於東高師

前列右ヨリ　川村進　兵藤世平治　明石毅　一人オテイ　後列右ヨリ　高橋朝次郎　進藤静太郎

一人オテイ　松本正雄先輩諸の球蹴文本〔團球蹴時代參照〕



蹴球團時代

故兵藤先輩を中心として

川村　通

先日部の田島君が見えて今度我が部誌の創刊を企てたに就いて、是非古顔と云ふ所で何か書いてほしいとの御依頼があつた。其の時正直の處僕は一種云ふべからざる感慨を催したのである。蓋し僕が一學生で而も此の蹴球部の一員として、あちこち飛び廻つて居つたのは左程遠い過去に屬するものと判然意識して居なかつたのである。併し云はれて見れば確に一昔前の事であつた。そしていつの間にか、當時の懐しい仲間とも離れ離れと成つて、あの頃には思ひも寄らぬ生活圏内に斯うして住み着いて居るのである。ハテ愚痴めいて聞えては今日様に相濟まぬ。兎に角商大と、更に廣く申さば商業學だの經濟學だのとは大分御縁の遠い昨今の僕の生活の中へも不思義に響いて來ては、心のカンどころに觸れるのが、我が蹴球部の事なのである。蹴球の事と云ふと、妙に是非も善惡も度外に置いて『かた』を持ちたくなる。そして只懐しいのである。新しい部員諸君には未だ一度もお目にかゝる機を得ない。だからせめて此の拙文を通じてなりと、お近づきにならう。そんな考へで、部の生れ出た頃の事共少し許り書き綴る事にした。田島君の御注文は部の史的記述のそれであるかも知れないが、どうも横着なたちで沿革の、歴史のと開き直る段に成ると矢張肩が凝る。それで隨感隨想でポツ〳〵と記憶の糸を辿り始める。

あの頃、さう、僕等が一ツ橋の學校に入つたのは大正九年だつた。歐洲戦後の好景氣が峠を越しては居たものの、まだほとぼりのさめやらぬ時分とて、昇格したての商大は大變な人氣であつた。入學して一年間は何も分らず、無我無中でキヤプテンオヴインダストリーの夢を見て暮したが、其の翌春

二年に成つて氣も落ちつくと、何か自分の營みらしいものが欲しくなる。此の時分であつた。猫額大の校庭に体操教官から借用の古びた籠球用ボールを、一人で蹴つて遊ぶ一壯漢を見出したのは、而も打ち見れば。彼氏聊か年輩の高商生である。註に曰く、當時未だ舊高商が殘存してゐた。陽春四月の陽を浴びて萬年シャツにパンツ一つ。ドタ靴踏み鳴らして鞠を蹴る。而して誰に見しよとて、蹴るでもない。孤りに甘んじて獨を樂しみ、天地間我と鞠在るのみと云はん許りの自適の狀心憎き限りと見た。食堂の壁に蹴あてし鞠は、轉じて以て學生集會所の窓を襲ひ、鞠を受け鞠を追ひ、縱横無盡の大活躍だ。破れた帽子をぬげば短く刈つたヅク入頭、ロイド眼鏡の奥に人なつこい眼が笑ふ。是が我が兵藤先輩であつた。何とはなしに惹きつけられて話したのが緣の端、忽ち僕も此の淸貧孤獨にして而も鞍馬山は義經の一人劍術的蹴鞠（敢て後年の蹴球と分つ）の仲間入をした。同クラスの明石毅君（現在大阪瓦斯に居る）も一緒であつた。さあ、之が妙に面白い。いや蹴るの何の、朝は始業前から蹴る。晝休勿論蹴る。放課後は最も蹴る。日沒に至つて纔に止む。日曜日にも登校して終日蹴つた。從つて仲間も日增しにふゑた。そして何時となく氏を呼ぶに『親方』なる名稱を以てする樣になつた。其の頃一味に加はつた乾分連の顏ぶれを二三紹介しよう。トモさん事、廣島一中出の高橋朝次郎君は、いつも頬に淡く血ののぼつた如何にも純眞なる少年と云ふ顏だちだつた。只むやみに背が高くて竹馬にでも乘つてゐるやうな感じがしたものである。但し其の蹴つとばす馬力に至つては、眞に凄じいものがあつた。我がマーチヤン事松本正雄君の如きは、勿論今日の如く禿げては居らん。恰も神宮外苑繪畫館前の芝生の如く美しき三分刈の頭を振り立てゝ、ゆで蛸の如く常に赤面しつゝ蹴つたものである。一級上の進藤靜太郎君はエスペランチストであつた。だから、足のさばきも國際的で、傍に見てゐた一生曰く『あの男日本人か、いやに蹴りやがるな。支那人だらう』と云ふ位。一体此の頃は支那人の留學生が多かつた。支那人は由來足わざが巧である。從つて彼等は、僕等の不器用にして亂暴なる蹴飛ばしを見るに見兼ねたのであらう。續々と現れ來つて、其の『玉なぶり』の妙を示し始めたものである。

其の年の六月頃であつたらうか。大分仲間も出來たから此際一チーム作つて、何處かと一試合しようぢやないかと、親

方が云ひ出した。僕等も亦無鐵砲さに於て敢て人後に落ちぬ時分だから、よし來たと言下に賛成した。そこで當時之亦出來たてのホヤ〳〵と云ふ早稻田の高等學院に掛け合つて、高等師範のグランドでやるときまつた。景氣をつけようと云ふので親方一流の名文で檄を草したのを僕等が惡筆を揮つて、模造紙何枚かに大書し、生徒控室に高々と揭げたものだ。『公孫樹梢綠葉濃かに』とか何とか書き出して、玆に商大蹴球團を結成し、强敵早大に當らんとするによつて、全學を擧げて來り援けよ。』と云つた樣な大變なものであつた。メムバーはと云ふと、FWに王さん干さん吳さん張さんなど〻支那人をズラリと並べて親方が采配を振らうと云ふわけ、HBにトモさん明石君、吉野君FBに進藤君は良いとして相棒がこの瘠せつこけた貧弱な僕、GKが紅顏の美少年マーチヤンと云ふ。チームワークもヘツタクレも無い。皆便衣隊みたいな連中で、第一線が奇聲をあげて例の玉なぶりの足どりよろしく敵陣めがけて揉み込むと、あとから竹馬に乘つたトモさんがヒョイ〳〵と大股に出て、馬力脚で敵の向ずねごとボールを蹴つとばしてのけようとふ仕掛けである。さていよ〳〵試合に臨んでみると、敵もさるもの、葬式の鯨幕の樣な黑白『はぎ』合せのユニホームを着てゐる所はなか〳〵勇ましいが、よく見ると、よくしたもので、あちらにも張三季四とか何とか言ふ面がまへがゐるぢやないか。だから此の試合期せずして、兩軍の戰法が一致した譯で、互に得點なしの引分であつた。レフェリーは誰だか忘れたがさぞをかしかつたであらう。試合後の紀念撮影寫眞は多分本誌の卷頭に揭載されるであらうから、就いて篤と御覽を願ひたい。試合の場所が僕の出身學校々庭と來てゐるのだから大いに我チームの武者振りを見て貰はうと思つて居たのに、何にも知らない見物の中學生が『ヤアこつちは支那人の學校だよ』と許り僕までアツサリ支那人の中へぶち込まれ、トント同情がないのにはがつかりした。其の後頻りにあちこちと試合をやつたが、先づ武運拙い方で勝つたためしは嘗てなかつた。其の中あまり校庭であばれすぎた爲、ボールを体操教官が貸してくれなくなり、互のポケットマネーを醵出して買つた事もあるが、いよ〳〵それも詰つた時、親方が一案を立てた。誰か先輩から寄附を仰がうと云ふのである。白羽の矢を立てられたのが、大先輩田中虎之輔氏であつた。氏は天下の糸平の御子孫ださうな。親方が云ふ樣は『田中さんの兄樣は慶應大學でラクビーを始めた人だ

から、弟さんの方はサツカーの後援をして下さる筈だ。』珍妙なロヂツクだが當時の僕等は成程さうだと大いに肯いたのである。所で田中さんと我々とは素より一面の識もないし、何しろあちらは桁外れに年長のえらい實業家で、こちらは黄口白面ではない赤面内至黑面の蹴つとばし團員だ。明石君、マーチヤン、僕の三羽烏を率ゐた親方はどうして知つて居たか、兎に角田中さんの銀行に僕等を引つぱり込んだ。そして首尾よく氏に面會して確かに大枚五十圓也を頂戴したのである。しやべつたのは親方一人で僕等乾兒は唯畏つてむやみに拳骨を膝の上で握りしめてゐたのみであつた。今にして思へば、氏はよく怪しみもせずに斯かる大金を下すつたものと不思議に堪へぬ。氏の太つ腹もさる事乍ら、氏をしてかくせしめたる我が親方の外交術も亦相當以上であつとた見ゆる。其の後此の拜領金は實に大事に用ひたもので、後年の我が部の基本金となつた次第である。而して其の時から、五年後、本科を出る迄僕は部の台所方會計方をやらされたのは妙な因緣であつた。

親方に就いては實に思出多く、到底一時に述べ盡し難い。只諸君も折に觸れて、マーチヤンからでもきかされたらうが高商部最後の卒業生として世に出るや、大阪朝日の社會部記者と成つての大活躍は恰も往年のグランドに於ける『もみ』込み的ドリブリング其のまゝに恐るべき威力を示したものである。然るに不幸胃潰瘍に罹り百方治療に力められし効もなく、昭和三年初夏、其の御郷里岐阜市の縣病院で逝去せられたのである。兵藤世平治と云ふと、何やら昔の草双紙中の人物めいて聞えるが、御本人は非常に進歩的にして、而も洒脫な性格、一見野人禮にならはざるかの如にして實は近代人の特に江戸つ子によく見るデリカシーの持主、嚙みしめるに從つて味の出る、眞に良き人であつた。學生時代、巢鴨の下宿でチブスにかゝつて死にさうになつた時、『あゝ！エライ、あゝエライ。』と途方もない大聲でどなつたのが、つい此間の事の樣に記憶してゐる。

僕等乾兒連が寄つてたかつて看護したのも今は、悲しき思出である。九段の中坂に下宿して居られた頃、押しかけて行つた僕等に、人は何んでもいゝからユニークな存在を確保しなければいかんといふ論を聞かしてくれた事もあつた。夫子自身慥かにその理想通りに其の生活を導いた事を今にして想ふ。何かの打明け話の節に、僕は二度自殺しそこねてね。一

度は確かに首を吊つたんだが、繩が切れよつてね。そん事も云つた。面白い人である。亡くなる少し前の三月末、僕が東京府の木つ葉役人生活の終頃、大阪へ出張した歸り道、親方を岐阜の病院に見舞つたのが、生前最後の對面であつた。傷しく衰へた手を伸して、到來ものぢやがと云ひながらパ、イアの一切を進めてくれた事も忘れられぬ。

親方に就いてはマーチヤンも明石君もトモサンも、古い馴染は皆盡きぬ思出をもつ。そして誰もが此の不思議な德をもつた人の事を、それぞれの視野の角度から見直して嚙みしめそれを新しい部の諸君にも語り度いと願ふだらう。

兎に角蹴球團時代の僕等の學生々活は、此の親方を中にして、一種の輝かしい世界を形造つた。方法も理論も只蹴つ飛ばして、鞠の如くまろやかに彈力のある結びつき、其處に清く樂しき生きがひを見出したのだつた。土煙を揚げてボールを追つた代々木の原、火鉢を圍んで淸談に時を忘れた下宿の二階、豫科も本科も專門部も何もない。朝鮮人も、台灣人も蕭さんも陳さんも、團員である限りは親しかつた。無條件で友愛の眞情が通うた。洵に不思議な團結であつた。

嗚呼當時の友よ！スキフト先生に敎はつた。テニスンの詩ぢやないが

『人は來りて又行けど
とはに行くべき我身とて』

己がむきむきの暮の川に流れ〳〵て再び戻る源のありやう筈は無いのである

されど懷しき心の故郷——
其處には昔乍らの若やぎの誰彼の面わが浮び出る
回想の糸は果しなく——
伸びて止まる處を知らぬ
併し——
此度は玆に惜しい筆を擱かう、
我が親方の
冥福を祈りつゝ——

——九・七・一三——

× × ×